



# 「見えないところでの管理」を重視する

## 「IPM防除」

### 最新の衛生管理の動きを見る

畜産農家にとって頭が痛いのは、家畜の病気で。だが、意外に徹底されていないのが、畜舎などの衛生管理だ。「慣れ」もあるが、最近是对症療法的な汚染対策から「目に見えないところでの管理」を重視する動きも出てきている。「検査」と「監視」を柱とする「IPM防除」もその一つ。専門家に最新の衛生管理について聞いた。

#### 「防除」だけでは家畜の病気を根絶できない

これまで畜産の衛生管理は「防除」が主体だった。家畜が病気になる畜舎が汚染されたときは、個別に対応するか、薬剤を散布するなどの対策を講じる。問題が起きたら、これを取り除く考え方だ。

こうした、いわば薬で衛生環境を維持する部分管理ではなく、トータルな衛生管理を唱えるのが、岐阜県大垣市に本社がある有限会社防除研究所の代表取締役、梅木厚生さんである。防除研究所は、食品や飼料の保管施設や製造施設、養鶏・養豚の施設を対象にネズミなど害虫の防除管理をしているが、長年の経験から

梅木さんは「防除だけでは家畜の病気を根絶できない」と言う。

「防除も大切ですが。しかし、その前に普段から家畜や畜舎に監視の目を光らせ（危険な状況）が起きないように管理する。そうでないと汚染対策の成果は上がらない。第一、そのほうが費用もかからず、従業員の衛生管理に対する意識も高まります。要はいかに有効にお金を使うかということですよ」

その場合、梅木さんが提唱するのは「5S活動」である。「5S」は「整理、整頓、清掃、清潔、躰」の五つのSを意味する。これらを徹底し職場環境を改善するのが「5S活動」で、製造業などで取り入れられている運動でもある。

外部と遮断された鶏舎やSPF豚舎は、「第三者の目」がないだけに、案内、衛生管理に（落とし穴）がある。整理整頓が不十分だったり、水周りが乱雑だったり、あるいはネズミの糞が落ちていたりする。極端な場合、経営者は口やかましく「衛生管理の徹底」を促しているのに、現場では従業員がタバコを吸いながら作業をしているケースすらある。

「五つのSは、すべて当たり前なことばかりです。それが行われていない。大事なのは、日ごろから全員が当たり前なことを守る姿勢に徹すること。日常生活で心がけることを畜舎に適用する発想です」

当たり前なことをやったからといって、それがどの程度、汚染対策に

結びついたかは見えにくい。だが、これからはこの「見えない部分での管理」が重要になると、梅木さんは指摘するのである。

#### 衛生管理は最後に人の問題に行き着く

現在、畜産の衛生管理で主流になっている「IPM防除」も、事前の



「5S活動」を提唱する、有限会社防除研究所の代表取締役梅木厚生さん

「インスペクション（検査）」と「モニタリング（監視）」が基本だ。

「IPM防除」は、鶏舎や養豚場の衛生管理を総合的に行うもので、まず対象となる施設を念頭にインスペクションし、ネズミが集中的に活動する場所や害虫の発生箇所を特定。次いでその場所をモニタリングを行い、どこに問題があつてネズミが横行し、害虫が発生するのか、原因の所在を見極める。そうやって問題点を絞った上で、被害を拡大させないためにも防除のための手段を講じるのである。

具体的に防除施工を進める前に、施設の現状を徹底的にチェックするところに「IPM防除」の特徴がある。その防除施工では、モニタリングの結果に応じて、薬剤による科学的防除、畜舎の周囲環境を改善する環境的防除、ネズミなど害虫が外部から侵入している場合は進入路を塞ぐといった対策が取られる。だが、それで終わりではない。

防除対策を実施した後には、対策の前と後でどれだけの差があるかを確認し、その結果をもとに農場の従業員を交えてディスカッションをする。そうやって日常的に害虫発生を防ぐ

方法を探っていくのである。

「従業員と経営者が管理対策を話し合うのは社員教育にもなります。そこにわれわれ専門家が加わることで、『客観的な目』で問題点や改善すべき点も指摘できます。その効果が大きい」

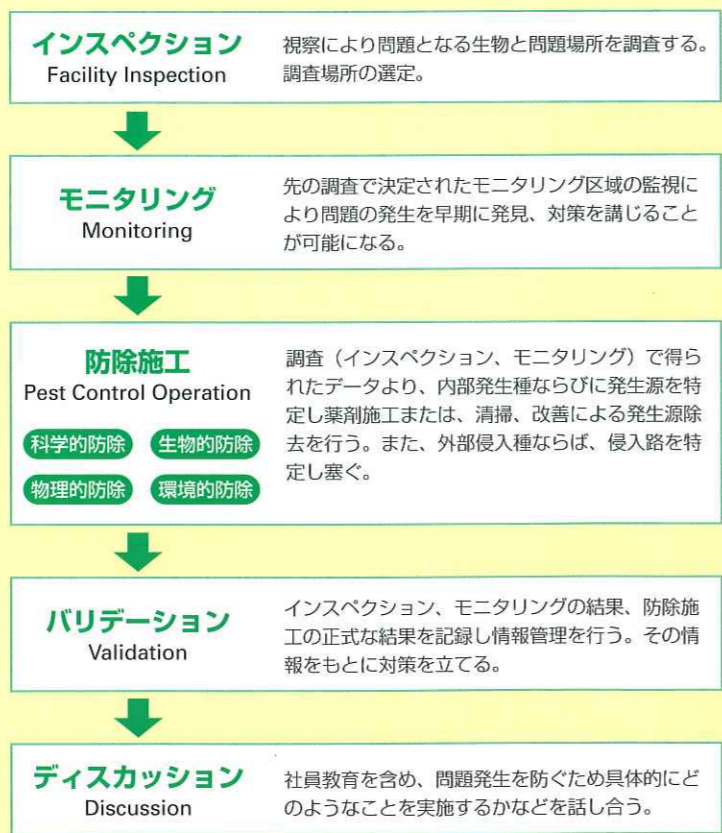
梅木さんは特にこのディスカッションを重視する。あらかじめ鶏舎や農場の責任者にヒアリングして、実態をどう認識しているかを聞くことでもある。個々の問題意識を把握しておいて、防除管理を進める過程で本人の衛生管理に対する意識がどう変わったかをチェックする。何も変わっていない場合には厳しく問い詰めることもある。

「衛生管理で最後に行き着くのは人の問題です。ISOやHACCP（ハセップ）も結構ですが、衛生管理への理解がないところで、それを言っても仕方がない。一義的には、従業員の意識改革を図るのが先決です」と梅木さんは言う。

#### 薬剤などによる殺菌は商品の付加価値にならない

「食の安全・安心」を実現するために、畜産農家の衛生管理に対する

#### IPM防除の流れ



関心は高いが、一方では日常の仕事に追われて有効な対策が取られていないという現実もある。

「農場での衛生管理がマンネリ化しているケースが多い。しかし、ちよつとした気の緩みで、それまで積み上げてきた安全管理態勢は一気に崩れてしまう。それは畜産経営が破綻することを意味します」

これからは薬剤などによる殺菌は商品の付加価値にならない。それは当然のことで、それよりは家畜や施設

設などの環境そのものを管理し、汚染の源を施設に持ち込まないという考え方が重要になる。

「生産から流通、販売にまで気を配りながら衛生管理を展開する総合的な視点が大事です。例えば、衛生管理の資格をライセンス方式にするなどの具体策も必要ではないでしょうか」と梅木さんは提唱する。

専門家育成の必要性も含め、今後業界として検討すべき課題はまだ多い。